

現代における思想性の一要素 についての考察

中山 浩 一

I

いつの日か、イエイツの全作品の緻密で全面的な研究が企画されなければならない。それは多分、より一層長期的な見通しの下になされるであろう。詩人の中には、経験と歓びのために、多少とも孤立して考えられ得る様な詩を書いた詩人達がおります。また詩が等しく経験と歓びを与えているが、より大きな歴史的重要性を有する詩を書いた詩人達も、他方におります。イエイツは後者に属するひとであった。彼は、その人の歴史がその時代の歴史であり、そういう詩人達なしには理解不可能な時代意識の一部を形成した、少数の詩人の一人であった。これは、非常に高い地位を彼に対して認めることであるが、それはゆるぎない安定した地位であると信じております。

(The Permanence of Yeats, p. 343 より訳出)

以上は、イエイツの死の翌年(1940年)、アベイ座に於て、T. S. エリオットがアイルランド学士院会員に対して行なった講演の、最後に述べられた言葉である。

ここで為そうとする考察は「より一層長期的な見通し」をこれに関連をもつイエイツの詩に下すことと、「歴史的重要性を有する詩」とはどういうものであるか追求を試みることである。

上述の目標は、具体的にはイエイツの深淵な思想の性格を解明しようと努めることに集約されるので、その前に詩の思想の性格を概観してみる必要がある。

詩に於ける思想に関して、チューミ(Raymond Tschumi)はその存在を肯定し、詩の思想は詩の中でより凝集せしめ得るものであり、思想の性格はそれが表明されている媒体並びに著者の意図によって異なるものであると述べている。従って、詩人の考え方は個々別々の性格をもち、哲学的体系の如く入れ換えの出来ないものである。そしてこの考える行為によって、詩人は宗教的権威から解きはなたれ、知識の分化する現今の時代にあっては、自らの詩にそれぞれ独自の調和感を満たすであろう様な一貫した考を披歴している。チューミの20世紀詩人の特色について語るところによれば、その作品は偉大なる教訓的・宗教的詩の伝統に属さず、これ等の作品から引き出され得るところの教義は、宗教的・倫理的・思弁的・社会的・実践的なものと見なし得ないと言っている。

更に、20世紀の詩的思想を特色づけるものは、その独創性、あらゆる流布している標準や教義のその無視、情緒や思想のその溶融また一つの根本的な問題にすべての問題を帰そうとするその試みであると語っている。

孤立した一人一人の詩人が独創的な仕方を経験し、情緒的に表明している教義は、それが如何に一貫した調和を秘めた考えであろうとも、また人生の根本をなす究極の問題に触れようとしていても、普通性をもつことは出来ず、詩人個人の感じた思想、言い換えるならば感情に投入された思想の再生という性格を留めるに過ぎない。けれども、詩の思想が思考という行為を、なまの形で躍動させている場合には、既知の現実を超脱して上級の実在に向って行く原始的な生動を孕むのである。それ故、詩の思想は詩から分離して分析したところで、その本来の有機的關係を保有していない以上、何の意義をも考えられない。しかも、チューミの説いている様に、哲学的な体系、とりわけ実証主義や唯物主義が主観を無視して客観を、努力なしの結果を、また五感を通して物体から引き出される様な抽象的観念を考えている限り、斯様なありふれた教義に居所を見出し得ないという詩の現実に対する態度は当然であると考えられる。

では、今の詩の思想性は如何なる状況から生来したのであろうか。

英国の哲学の創始を告げるバイコンの“Advancement of Learning”と“Novum Organum”は、共に17世紀初頭に相続いで世に出たが、その中で哲学は科学の延長として考えられていた。即ち哲学者は科学者によって獲得された特殊な確信から、全般的な結論を下すのである。バイコンの概念は科学に追従する哲学の一面を表明しているが、この様に経験科学の急速な発達により注目されている17世紀は、また詩に於ける観念的思想の台頭によっても特色づけられている。17世紀の形而上詩人は世界の科学的説明に対して、宗教的感情により靈感を得た詩の思想をもって対抗した。すでに確立せられた価値や観念はケプラーやガリレオによって差し出された新しい世界観により危険にさらされ、経験科学哲学を強力に抑圧し続けていたスコラ哲学はすでに過去概念として、命脈をとどめているにすぎなかった。ジョン・ダンの実験科学とアリストテレス学派の範疇との間の矛盾を十分知っており、同時にその詩への作用も克明に感じていた。

形而上詩人の不安感は、世界が専ら物質からなると考える思想に結びつく十分の可能性を有する経験科学から発しており、詩の住家の喪失を予測したことに因る。ダンが詩の中で、上述の世界観から取られた観念を使用する場合、それは観念ではなくて、それから引き起された情緒を表現している。彼にあっては、詩の思想は何の関心にも当らず、単に感情から湧出したに過ぎない。どんな思索の体系も、いかなる人生の釈

明も信頼すべき拠りどころとして採り上げられたのではなく、彼のはげしい個人的な情調よりの気まぐれな弄びなのである。ダンの作品を通して流れる魂悪さの調子は、現実に合致しえざる羨望に似た態度より発し、新しい思想に審美的に反抗しているのである。そして彼の苦しみはその皮肉の中に安らぎを見出し、その宗教的感情は審美的概念に結合されている。ダンの懷疑は美の幻想の前で消失し、詩的な真実が存在するという鞏固な確信によってくつがえされる。この確信は形而上詩人に見られる古い哲学上の伝統即ち外側の世界ではなく、人間の魂が哲学的思考の主題となっている伝統の復活となって、詩の思想を醸成し、結合不可能な知識に一貫した形を賦与せんとする調和への指向を意味するものに外ならない。

17世紀の形而上詩人は、上述の様に経験科学及びそれに追従する立場にある哲学とは対蹠的な方向を辿った訳であるが、中でもダンの、現実上の世界観を情緒化し、詩的確信まで高め得たことは、同様のより一層の物質的潮流にあえいでいる20世紀の詩の傾向と状況を同じくする。そして斯様な状況下に於て、すべての詩が上記の如き同一の傾向をとったのではないという事に留意せねばならない。また、哲学も挙げて流れに身をまかせていた訳ではなく、種々の立場にある学派が鼎立してそれぞれの問題の局限された領域を探索していた。特に今世紀の詩に関連を有する哲学は、現実主義や経験主義と異なった立場にある観念論者のそれである。観念主義学派の総帥と見なされるブラッドレイは“Appearance and Reality”の中で、形而上学は二重の仕事を有し、第一に現実を単なる外見に対立するものと考え、第二に断片的考えをとりあつかわないで宇宙を全体として考えることを主張している。ある局限された狭少な立場を掲げず、現実を全体として把握したいという観念主義者の欲求は、本来の哲学上の伝統に根をおろすものであろう。

これ等の観念主義が同じ傾向をとる詩に共鳴や直接・間接の影響を与えたとしても、不思議はない。というのは、外的世界は哲学や芸術にたずさわる人々全体を包含している共通の舞台であるからだ。

けれども、詩は情緒的な世界であり、リズムカルな生の躍動を不可欠の要件としている世界である。そして情緒的に何の意味も持たないであろう様な思弁の狭い特殊領域よりも、観念が情緒的に変客され得る様な全般的な理論を受け入れる態勢にある。

今世紀の経験科学の発展から生来しているものは、あらゆる連携の疎遠化であって、早急の解決をまたれるのは、それ等の統一である。そしてその一端を担う役割を果そうとしているのが、今の詩であると考えられる。

その方法は、先に17世紀にその先鞭をつけられた如く、質的なものにたよることと

内的価値の承認である。つまり詩人は外的世界の救済としての観念を新しい美の枠にまで昇格させる任務を課されているかのように見える。というのは、哲学的思想と詩的思想との間の相違は観念にあるのではなくて、客体として取り扱われているか、主観的精神状態として取り扱われているかにかかり、後の手段こそ詩人特有の武器であるからである。

そして観念主義の外的な証拠からではない内的な確信と、それがあらわされねばならない宿命を詩という表現の場に持ち来たことによって、現世紀の未曾有の文明上の危機に解決の糸口を見分しているのである。

今世紀に於ける詩の観念主義思想の偉大なる担い手の一人イエイツの詩を具体的に辿ってみたのが以下の項である。

II

いままで行なって来た主張の観点に立脚する時、イエイツの「幻想録」(A Vision)は彼の体系を盛り込んだ唯一の拠り処として、極めて注目すべき書物であることが解る。というのは、1914年後に書かれたイエイツの詩の多くは、彼の哲学的な体系を念頭において始めて、理解が可能だからである。ここでは、この体系の考察から始め、次の章から順を追って、これと特に関連をもつ詩を選択し、詩の思想性に触れてみるつもりである。

「幻想録」という標題から受ける我々の印象と、それが書き始められた直接の端緒には、少なからず不明確な部分を導入としてもっている故、体系の解説にはいる前に、イエイツが何故体系を構成する必要があったかという問題を推察することは重大である。

イエイツは「自叙伝」の中におさめられている「ヴェイルのゆらめき」(The Trembling of the Veil)の中で、次の様に言っている。

I am very religious, and deprived by Huxley and Tindall, whom I detested, of the simple-minded religion of my childhood, I had made a new religion, almost an infallible Church of poetic tradition, of a fardel of stories, and of personages, and of emotions, inseparable from their first expression, passed on from generation to generation by poets and painters with some help from philosophers and theologians. (Autobiographies, p. p. 115 and 116)

ハックスレイ (Thomas Henry Huxley, 1825-1895) はダーウィンの進化論の継承

者であり、ティンダル (John Tyndall, 1820-1893) はティンダル現象の発見等により著名な英国の物理学者で、共にイエイツの幼少時に多大の影響を世相に与えたものと推測される。「私は非常に宗教的な人間であり、私の嫌悪するハックスレイやティンダルのおかげで、幼少の頃の純真な宗教心を喪失してしまったので、私は一つの新しい宗教をつくり上げたのであった」と述べている通り、イエイツもその例外ではない。その結果、精神上の空白が訪れ、それから「一束の物語、人物、情緒の集りから成り立ち、しかもそれらが最初に表明された時から、不分離の詩的伝統であり、哲学者や神学者から多少の援助をうけて、詩人や画家達により代々引きつがれてきた詩的伝統の、誤りを犯すことなき教会と言われるべきもの」を創造しようと思いついたと考えるのが至当の様である。既存の精神的権威の土台は経験科学の進展により衆知の様な結果を生じ、また我々の心の拠点まで侵蝕するに至った物質文明は「感覚資料にもとづく有限の知識の堆積に過ぎない。科学が本来の領域を逸脱して心の中にまで介入しようとする圧倒的現実に対し、一つの大いなる試みを思索せんとする萌芽は、イエイツの様な偉大な詩人の早期に宿った当然の事態とみなされる。批判家の中には、イエイツが科学をひどく嫌悪していると考えている人もあるが、かりにその様な表現があったとしても、真実とは考えられない。

というのは、彼の体系では科学と詩を明瞭に截別するどころか、両者を統合し、科学を大きく抱擁している観を抱かせているからである。

I wished for a system of thought that would leave my imagination free to create as it chose and yet make all it created, or could create, part of the one history, and that the soul's.

「想像力が自由に創造のはたらきを演じ得る余地があり、しかもその想像力が創り出したり、あるいは創り出し得たりしたあらゆるものを、一つの歴史、それも霊の歴史の一部に統合する様な体系」というものは、万象を網羅するものでなければならない。この様な枠の中では、もはや対立や反目や侵害はあり得ない。ただ経験的世界と超経験的世界の融合の状態があるだけで近代文明の希っている調和をもたらそうとするものであろう。実際、経験科学を元のあるべき場所に戻すためには、あらゆる物を収容し得る最大の体系の設定以外に、現代生活の偶々まで行き亘った物質文明の勢力に対抗する事は出来ない。以上の様なイエイツの現実的立場に立った積極的意図を十分理解するならば、彼の科学に対する表層的感情は、本来の彼の考えと関聯させるべきではないことに行き着くであろう。

自叙伝の引用文中にある通り、「幻想録」の起源は幼少の頃より、すでに始まって

いたと考えられる。それが一つの体系として実り切るまでに通って来た道程は、予想外に長いのである。1925年、「幻想録」は自費出版の形であられたが、それより10年以上前の詩に、その思想が明瞭に表明されている。また、それ以前ですら、イエイツの詩と個性には変遷の跡が見られる。例えば、1903年の詩集「七つの森にて」(In the Seven Woods)の中の「アダムの呪い」(Adam's Curse)や「水のおもての自らをたたえる老人達」(The Old Men admiring Themselves in the Water), またより明瞭には1910年の「緑のかぶと、その他の詩」(The Green Helmet and other Poems)の中の「英知、時と共に到来す」(The Coming of Wisdom with Time)等であり、1914年の詩集「責任」(Responsibilities)中の「衣」(A Coat)はイエイツの転起を公然と告げているので、よく引用される詩である。彼がロマンチックなアイルランドの世界の過ぎ去った事に気づき、そういう衣を脱ぎ棄てて「裸で歩むこと」(walking naked)を決意した時の齢は、49才であった。

A Coat

I made my song a coat
Covered with embroideries
Out of old mythologies
From heel to throat;
But the fools caught it,
Wore it in the world's eyes
As though they'd wrought it.
Song, let them take it,
For there's more enterprise

In walking naked. (Collected Poems of W. B. Yeats, p. 142)

イエイツ研究書の中には、「幻想録」の起りを「古い神話から」思想体系へ、またケルトの黎明からアイルランドの諸事件への推移に、重点を置いて解説しているものがあるが、これ等は体系形成への過程であり、第一義的に取り扱うのは誤りである。たしかに初期のイエイツは、フランス象徴主義者の影響を多分に受けてアイルランドの神話を持ち来り、数々の象徴に手の込んだ審美的な、また生き生きした性格を賦与し、一転して霹靂の如く現実に向かい、かつての迷いを述懐している。靈感を得たかのような急転は、そこに「幻想録」の意図を汲み取りがちであるが、後述する如く彼の思想体系はその様な直感で達し得られる種類のものではない。また現代には、単なる直感で解決不可能な問題が山積しているのである。従って、これ等の変化は今世紀を

取り巻く現実へ指向する彼の転機となったという意義以上に重大視すべきではない。また子供の頃の純白な感受性のとらえた希求が、長期の雌伏を経て漸く雄飛する契機を得たと見るべきであろう。

ところで「幻想録」の直接の機縁をつくったのは、イエイツ夫人の靈感の働きによる自動的な記述で、イエイツは夫人の書いたものに眼を通していた様である。けれども、夫人はこのオートマチック・ライティングに対して、

“.....we have come to give you metaphores for poetry.”

即ち、彼の詩に隠喩を提供するつもりであったと述懐しているのである。従って、彼女のオートマチック・ライティングは真似事であり、イエイツは接神論のもつ超経験的要求に刮目し、眼前で妻の実行する不可思議な行為に力を得て、幻想・催眠・信じ難い出来事等の超自然的なものの存在に確信をもった様である。要するに、彼の妻の行為は彼の体系形成への踏台となった訳であって、それよりもむしろ関心の対称は占星学・接神論・超経験論的現象・スエデンボルグ (Swedenborg) やボエーム (Boehme) であった。またそれ以前にも、パークレイ (Berkeley)、ビコ (Vico)、ホワイトヘッド (Whitehead)、ジェンタイル (Gentile) その他の哲学者をかなり研究しており、実際「幻想録」の中に、オートマチック・ライティングをさせた張本人 (instructors) と他の哲学者達とを比較し、しかもその権威に疑念をもっている文章があることも上述の裏書となろう。しかし哲学書に多く影響されているとはいえ、「幻想録」なる標題の示す如く、所謂哲学として信頼し得るに足る価値を問うよりは詩の中に導入された場合の諸問題を考究すべきであり、両者の関係こそ一層重要な課題を秘めているのである。イエイツのスタージ・モアとシェークスピア夫人宛の未公開の書簡で、彼が哲学者としてあまりにまじめに考えられてはならないと述べている箇所があるとチューミは言っている。

「幻想録」の体系は図式の形をとって説明している。この図式の出所は1594年「天使と人間の鏡」(Speculum Angelorum et Hominum) という表題でジラルダス (Giraldus) なる人物によって書かれた本の中にあったものだそうである。「幻想録」中では、イエイツの想像力の根源と考えられている象徴的人物ミカエル・ロバーツ (Michael Robertes) が、ポーランドでこの古書を発見し、メソポタミアの砂漠上に描かれている同様の図式にもまた興味をもち、アラビアに滞在して解読したという物語となっている。しかし図式の起源や説明は不祥であるらしく、月の四相が上下左右に配置されているところから、ヘブライ神秘思想の占星術と連なるものの様に考えられるが、判然としておらない。

とも角、この図式を骨格として、神秘的な考えや哲学を比較検討し、かねてよりイエイツの心に滲透していた現代の思潮との溶融をはかったのが「幻想録」の構想と考えられる。

次に、体系の諸原理の解説をしながら、それに抵触する問題を吟味してみよう。

イエイツはこの図を「大車輪」(The Great Wheel)と称している。そして、人間の個性はこの「大車輪」上にあり、その位置如何によって決定されるとしている。即ち、南の極では「完全な主観性」(complete subjectivity)の型をとり、北の極では「完全な客観性」(complete objectivity)の型となる。そしてこれら両様の完全な型は、この地上では達成出来ないものとなっている。図の上では、これらの移り変わる型を月の満ち欠けで表現している。「大車輪」上における月の相は二十八の具体的な相をとると考えられており、「完全な主観性」は客観性を象徴する太陽から月が最も遠く離れている時の満月の相(第15相)であらわされ、これは第8相(図の西側の半月)から満月を経て第22相(東側の半月)に至る南側半面をなす「対照をなすもの」(antithetical)の極点である。「完全なる客観性は太陽に最も接近している時の暗黒の月の相(第1相)の形をしており、これは第22相から第8相に至る北側半面をなす「根源的なもの」(primary)の極点にあたる。

以上の様な極相が土台となり、人間の個性は主観と客観の混合した相を呈しているが、完全なる客観性である第1相と完全なる主観性である第15相は混合しておらず、超自然・超人間の性格をあらわす。また肉体の形をとる人間は「四つの機能」(Four Faculties)を有し、それ等はそれぞれ「意志」(Will)、「仮面」(Mask)、「創造心」(Creative Mind)、「運命体」(Body of Fate)といわれる。「意志」は平常の自我、「仮面」はわれわれの顔望の対称或いは善の表象、「創造心」は意識的な構成力を有するあらゆる心で思想等これにはいり、「運命体」は外部から強いられる一連の現象である。

以上の四つの機能の関係は、「意志」と「仮面」とが自我と欲するもので対立し、「創造心」と「運命体」がやはり共に相対的な立場にある。また、これら二組の相対物は、月の相の反対側にそれぞれ位置を占めるのである。例えば第16相の「意志」をもつ人間は、第2相の「仮面」をつけるのである。

これらの関係をより一層くわしく説明するために、「渦巻」(The Gyres)と名づけられた二つの相対する位置にある円錐形のもの、即ち一方の円錐形の頂点が他方の円錐形の底に達して相互に組み合っている格好のものであらわしている。「渦巻」は「大車輪」の中に位置しており、肉体のもつ「四つの機能」は「大車輪」の上を水平又は

垂直に動くものであるという想定を下している。即ち、立体的な説明を加えている訳である。具体的には、「意志」と「仮面」は対をなして最も低い発展段階に達し、一方「創造心」と「運命体」は完全な発展に達する。一方の「渦巻」の「意志」は他方の「渦巻」の「仮面」であり、また一方の「渦巻」の「創造心」は他の「渦巻」の「運命体」である。例えば、17相の人が3相から「仮面」を有し、13相から「創造心」をまた27相から「運命体」を有する様に二つの「渦巻」は回転する。要するに「四つの機能」が対立し合う様な動的構造をとっているのである。

以上で「大車輪」の概説を終るが、この辺でイエイツの体系の特徴を考えて見る必要がある。

イエイツの体系において最も注目されるものは、世界或いは存在するあらゆるものは循環する精神状態の一つの連鎖、否むしろ一つの循環として考えられることである。その上、この体系が架空のものでなく、具体的な実例を証拠としてもっていることである。第1相にバックス、第6相にはホィットマン、第11相にスピノザ、第12相にはニーチェ、第14相にキーツ、第16相にはブレイク、第17相にイエイツ、ダンテ、シェリー、18相にはゲーテ、第20相にシェークスピア、バルザック、ナポレオン、22相にはダーヴィン、スエーデンボルグ、ドフトエーフスキー、27相にソクラテス、パスカルの如き聖人、28相には阿呆 (The Fool) 等、この体系の中で明瞭に個性を解剖されている。従って事実を促した体系を企図していることになる。ブルックス (Cleanth Brooks) は「現代詩と伝統」(Modern Poetry and Tradition, p. 175) の中で、

The account given by science is still abstract, unconcerned with values, and affording no interpretation. Yeats wished for an account of experience which would surmount such defects: as he once put it, a philosophy which was at once "logical and boundless." The phrase is an important one. Had Yeats merely been content to indulge himself in fairy tales and random superstitions, he would never, presumably, have bothered with a system of beliefs at all. A philosophy which was merely "boundless" would allow a person to live in a pleasant enough anarchy. The "logical" quality demands a systematization, though in Yeat's case one which would not violate and oversimplify experience.

と云い、「科学によって与えられる説明は抽象的で、価値の問題に触れることが無く、何の解釈ももたらさない」が故に、ここで「論理的でまた無窮の哲学」が要求され、わけても「論理的」なるが故に「体系化が必要となり」、上記の例証の如く「イエ

ツの場合には、経験にそむくことも経験を単純化しすぎてしまう」こともない、経験に即した体系化が要求されるのである。

また、図式的な形や機械的説明それから秘教科学に結合した象徴への過度の信頼は、この体系が全体的に見て静的な体系で、詩の中で行なわれて来た精神上的の多くの実験の体系化的傾向が強く、言い換えるならば詩的体系として詩の中に存在すべき性格を本来賦与されているといった感がある。

一方、上記の「四つの機能」をイエイツは緊密に彼の個性の矛盾と結びつけていて、その結果は「仮面」をつけて真にあったものとは違って眺められる二重の個性となっている。

体系から受ける固着的な印象は、以上の「仮面」の設定でかなりの融通性をもって来る訳で、特筆すべき特徴の一つであろう。

また、体系の中で意識と潜在意識との関係も取り扱われている。これは、三つの部分即ち歴史（後述）、人間心理（前述）及び死後の靈魂の生からなる体系の最後の部分に関連を有する。「幻想録」の中でイエイツは、

The Four Faculties are not the abstract categories of philosophy, being the result of the four memories of the Daimon or ultimate self of that man. His Body of Fate, the series of events forced upon him from without, is shaped out of the Daimon's memory of the events of his past incarnations; his Mask or object of desire or idea of the good, out of its memory of the moments of exaltation in his past lives; his Will or normal ego out of its memory of all the the events of his present life, whether conciously remembered or not; his Creative Mind from its memory of ideator universals—displayed by actual men in past lives, or their spirits between lives.

と述べている通り、現世の人間心理を構成する「四つの機能」は、「人間の窮極の自我であるダイモン (The Daimon) の四つの記憶の産物なのである。個人の「運命体」は、彼の前世に於ける出来事に関するダイモンの記憶から形成される」。そして上記引用文の示すところから考えて、人とダイモンとの関係は次のようになるのである。人の「意志」はダイモンの「仮面」であり、人の「仮面」はダイモンの「意志」である。「運命体」と「創造心」との関係も同様であって、両者は対称的な性質を有するのである。人間とダイモンとの闘争は死に於て終り、その後は人間は快樂や苦痛のないまた善・悪から解放されたある種の循環を通してゆき、自分の前世を一切忘れて新しい

関係に再生する。故に、死後の循環中も、魂だけは肉体を離れて存在し、生きている人々と夢の中の如き種々の状況の下で交感するのである。

また、ダイモンと同様に、人間は死者達の影響もうけて、世界の大きいなる集合的記憶である「世界の魂」(Anima Mundi)に参加する。

たしかに、彼の決定論的な体系は人間性と歴史に不十分な説明を加え、観念論的、静的、悲劇的また宗教的性格をもっているが、最大の特徴は宿命論的思考であろう。死後に於ては、悪よりの浄化はあるが、この世の悪は野放しである。また「大車輪」上では多少の融通性があるが、あくまで体系の枠内での自由である。体系の錯綜を極めた具体性と、それから必然的に結果する如上の宿命的性情の故に、受動的で、有限の狭少性の存在はまぎれもないことであるが、これが詩の試みから生じた体系であり、詩の中でそれを信ずることによって、自由奔放な駆使と内的確執からの情調を醸成出来たとすれば、一つの大きな進展をなしたと言える。というのは、イエイツがこの体系を熱狂して迎えている事態は、我々の絶望的現実と相反し、錯綜を極めている全世界に希有な悲劇的歓喜を提供したと考えられるからである。

しかも、彼の熱狂が詩中の象徴に変容を来たし、一層の豊富さをつけ加えている。しかし、もし「それは詩的伝統の絶体誤りのない教会であって、一束の物語・人物・情緒の集りから形成され、それらが最初に表現された時から、一体となってまとまっている詩的伝統で、哲学者や神学者から多少の助けを受け、詩人や画家達により代々継承されて来たもの」(前出) というこの体系の万人共通の母胎即ち彼の熱狂の根底を崩壊する様な事があれば、詩の暗示的な面の価値は拠り処を喪失することになる。また、それどころか現実の地におちた主観の立役者を失ってしまう危険に直面しなければならない。

言うまでもなく、「幻想録」はイエイツの哲学的思想の全部を含んでいない。けれども、この論考の最初に述べた科学に追従する哲学上の伝統的系列から、新たな飛躍を試みた著作といってよい。そして、以下の引用は科学や抽象に対する一つの強固な確執をもっているイエイツをうかがうに足るであろう。

This seems to me the simplest and to liberate us from all manner of abstraction and create at once a joyous artistic life. However, when one admits, if one does, the mind which creates all is limited from the start by certain possibilities one admits Platonic ideas, and so a prenatal division of 'unconscious' into two forms of mind. This is a Vedantic thought. However, I try always to keep my philosophy within such classifications

of thought as will keep it to such experience as seems a natural life. I prefer to include in my definition of water, a little duckweed or a few fish. I have never met the poor naked creature H₂O. (Yeats' Letters to Sturge Moore, No. 1, December 8)

しかも、彼は外的事物からの芸術の独立を信じたいと考えていた。実際、自然は本質的に象徴的である様な体系で、総体を把握する以外に充大な術はあり得ない。外的世界の事物はたしかに詩の中にとり入れられ、主観的情調を表現する象徴になっているが、もはや単なる事物でなく、主観性に駆使されまた主観性をあらわす単なる支えとしかならないのである。

イエイツは外的事物から抽象や科学が独立するために、彼の象徴に不動の権威を与える様な体系を必要とした。このために、西欧世界を席卷する現代の潮流を東洋の古い思想に源をもつ「大車輪」までさかのぼったのであろう。従って、「幻想録」の体系に忠実に従って詩作することもなかった。事実、彼の詩にあらわれている象徴にかなりの改変が見られるし、自らの体験や、架空の人物が登場している。また、新・旧の「幻想録」自体にも相異を見るのである。

これは、イエイツが何物にも犯されることなき世界構成を實踐して止まない彼の心底を暗示している証左となるものであろう。ここに、イエイツの体系の所以があると考えられる。

III

「大車輪」の28相はイエイツの精神構造を総括している。「我、汝の主なり」(Ego Dominus Tuus)は「意志」と「仮面」の問題に関係深い自叙伝的な詩である。この詩は Hic と Ille 即ち this と that の対話形で書かれている。

Hic. On the grey sand beside the shallow stream

Under our old windheaten tower, where still

A lamp burns on beside the open book

That Michael Robertes left, you walk in the moon,

And, though you have passed the best of life, still trace

Enthralled by the unconquerable delusion,

Magical shapes, Ille.

By the help of an image I call to my own opposite, summon all

That I have handled least, least looked upon. (Collected Poems of

W. B. Yeats, p. 180)

ダンテとキーツを例に引き、次第に問題の核心にはいって行く。両者は共に「反対物」(opposite)を有しており、それが偉大なる芸術に結果したという。

この詩は、1918年に著わされたイエイツの随筆集「月の好意ある寂けさによりて」(per Amica Silentia Lunae)の中の「人間の魂」(Anima Hominus)の以下の文を参照すると、理解し易い。

We make out of the quarrel with others, rhetoric but of the quarrel with ourselves, poetry. Unlike the rhetoricians, who get a confident voice from remembering the crowd they have won or may win, we sing amid our uncertainty; and, smitten even in the presence of the most high beauty by the knowledge of our solitude, our rhythm shudders. (Mythologies, p. 331)

即ち、「われわれは不安の真ただ中で詩を創る」のであって、これで「反対我」の存在理由がはっきりしてくる。

Nor has any poet I have read of or heard of or met with been a sentimentalist. The other self, the anti-self, or the antithetical self, as one may choose to name it, comes but to those who are no longer deceived, whose passion is reality. (ibid.)

そして「欺かれることのない人々や、その感情が実在である様な人々」言い換えれば、現実と自我とのくいちがいを深く意識している者にのみ「反対我」が出現するのである。詩は「自分自身との争い」つまり、自己が自らを凝視し、自らの中の反対物と格闘することから誕生するのである。

この詩の中の Hic と Ille のやりとりは、「感傷家」即ち、所謂行動の人と芸術家即ち、「反対我」の出現者との間のそれであろう。

Hic. Yet surely there are men who have made their art
Out of no tragic war, lovers of life,
Impulsive men that look for happiness
And sing when they have found it.
Ille. No, not sing,
For those that love the world serve it in in action,
Grow rich, popular and full of influence,
And should they paint or write, still it is action:

The struggle of the fly in marmalade,
..... (Collected Poems of W. B. Yeats p. 181)

けれども、対話形で書いたことに対するイエイツの主眼は、対比の試みであり、対比することによって Ille の性格を強調しているのである。この場合の並置はそういう可能性を秘めており、もし我々がルネッサンスの時代に生存していたら、恐らく Hic に共感するであろうからだ。

本来、Mask は演劇に使用されるものであるが、これを精神構造の一要素である「反自我」の概念にまで登用し始めた兆がこの詩に見え始めたと言う事が出来よう。しかし、その「反自我」が自己表現をめざしながら、いつも創造することが出来ない今日の人達の葛藤を述べているのみで、そこに「意志」に裏打ちされた強力な「仮面」つまり、独立した詩的思想を見るまでに至っていない。

Ille.by its light
We have lit upon the gentle, sensitive mind
And lost the old nonchalance of the hand;
.....(ibid., p. 180)

「自我と霊との対話」(A Dialogue of Self and Soul) では、「霊」に、心を自己の英智と思索の世界に誘わしめている。

My Soul. I summon to the winding ancient stair;
Set all your mind upon the steep ascent,
Upon the broken, crumbling battlement,
Upon the breathless starlit air,
Upon the star that marks the hidden pole;
Fix every wandering thought upon
That quarter where all thought is done:
Who can distinguish darkness from the soul?
(ibid., p. 265)

また自我に、愛や戦いの愚劣さを召喚させている。しかし「自我」は「霊」に応ぜず、この苦難にみちた人生を歓喜するのである。

We must laugh and we must sing,
We are blest by everything,
Everything we look upon is blest. (ibid., p. 267)

そして佐藤氏の送った日本の古刀こそ、この世の象徴として、様々の苦難を経、な

お明鏡をあざむく程曇らないという。

My Self. The consecrated blade upon my knees
Is Sato's ancient blade, still as it was,
Still razor-keen, still like a looking-glass
Unspotted dy the centuries;.....(ibid., p. 265)

この詩では「自我」の主張が目立ち、現世におかれた人間の一つの姿態を呈示している。

そして「逡巡」(Vacillation)に於ても、やはり霊のすすめを拒絶している。そして神聖なるものは人生の一方の極に過ぎないので、離別を宣言する。だが霊の再生の考えがこの詩にはあらわれている。

.....Those self-same hands
perchance
Enternalised the body of a modern saint that once
Had scooped out out Pharaoh's mummy.....
.....(ibid., p.285)

そして実体と外観の両極を揺れ動いて行き、人生は肯定される。

Homer is my example and his unchristened heart. (ibid., p. 286)

「塔」(The Tower)はイエイツの人生経験と思想が渾然と融合している。「塔」の最初のところのイエイツの老令についての不平は、彼が彼の「反対物」を望んでいるので一層いきいきとしている。

Never had I more
Excited, passionate, fantastical
Imagination, nor an ear and eye
That more expected the impossible——(ibid., p. 218)

次の部分では、彼よりも以前にバリリイ塔(Thoor Ballylee)に住んでいた人達の物語をしているが、失われてしまった過去にこがれており、うらぶれた感を抱かせるバリリイの古塔にふさわしい人々である。

最後の部分に至ると、詩人は自らの意志を形成し、自分と同様の自由な人達を考えている。

It is time that I wrote my will;
I choose upstanding men
That climb the streams until

The fountain leap, streand at dawn
Drop their cast at the side
Of dripping stone; I declare
They shall inherit my pride,
The pride of people that were
Bound neither to Cause nor to State,

.....(ibid., p. p. 222 and 223)

そして自然によっても環境によっても圧倒されることのない自らの世界を創造する人達を語る。彼等は生や死をつくり、万物を、また太陽・月・星などまでもつくり出したのだという。イエイツの体系の循環論無しには理解に苦しむところであろう。

最終の部分では、英知を求めて人里離れた生活をいとなみたい希望をのべている。彼の体系の対称的な諸相即ち月の特性から引き出される暗黒と神秘を喚起すべきところである。

Now shall I make my soul,
Compelling it to study
In a learned school
Till the wreck of body,
Slow decay of blood,
Testy delirium
Or dull decrepitude,
Or what worse evil come——
The death of friends, or death
of every brilliant eye
That made a catch in the breath——
Seem but the clouds of the sky
When the horizon fades;
Or a bird's sleepy cry
Among the deepening shades. (ibid., p. p. 224 and 225)

「塔」における彼の創造は明晰で、対称的（月の諸相）である。彼は人間の心から独立している世界観を放棄し、自然を心の投影として考えている。

イエイツの最終詩集に表明されている特性は彼の詩経験の最後を飾るにふさわしい。平明な調子には、何の形而上的な要素も見出し得ない。だが彼の体系は背後に潜んで

いる。透明な美しさ、神秘さにあふれながらも、極めて率直に、何の抑制もなく、常人には思いも及ばぬ情熱のほとばしりに遭遇する。バラッド形式を模倣し、ありきたりの仕方で書かれた平坦な節度の一貫した調子の中に、彼の非論理的な主題即ち狂気・美・熱情が、なまの形で出現する。高齢に達して完璧なこれ等の表明に至るのは、彼自身の感情の自然なあらわれではなく、彼の意図が含まれているからである。これは彼の心に必要な平衡であり、背後には彼の不動の体系が存在し、それに対する確信がイエイツを支えているのである。確かに誰しもこれ等の詩に極度の感応をおぼえるのであるが、その完全な表現には冷徹さに打たれる感じをもつ。熱情がぎりぎりの限界までもって行かれた場合、普遍の形をとって行くのであろう。それはこまごまとした末梢から孤立し、また同時にそれ等を包含し破壊する全体つまり彼の体系の中で完全であるからである。彼の体系は彼の詩に欠くことの出来ないものであり、土台となっていることを更めて痛感するのである。

III

前章ではイエイツの体系の個性に関連を有する詩を選び出して、詩と体系との結びつきの一端を示すことに努めたつもりである。そして多様な過去の遺産の裏づけによって、つまりイエイツの称する「世界靈魂」(Anima Mundi)からの発散物として個人と歴史的時期が規定されている故、動かし難い権威を持っていると言えるであろう。

一方、歴史理論は比較的理解し易いが、その根拠はかなりあいまいである。イエイツの説くところによれば、人類の文明は二千余年を周期として循環し、成長・成熟・衰頹の三つの時期に分割されている。そして「大車輪」上の月の28相の運行につれて文明の様相が変わると考えられている。更にこの循環は二つの二次的な循環に分かれ、それぞれ29相を有し周期は一千余年となっている。古代の暗黒時代にはじまったキリスト教文明は、現代に於て循環を完了しようとしており、再び暗黒時代に突入せんとしている。ピザンチン文明とルネッサンス文明は、これ等二つの二次的循環の15相に相当し、文明の成長を意味している。以上の歴史理論は明らかに文明の進歩を否定する回帰論である。

彼の体系は運命に対して諦観的であり静的である。また彼の確執は主観と客観の間のそれであって、宗教に見られる様なこの闘争からの逃げ道もなければ、両者の関係の改善など考えられない強固な宿命観である。しかしながら文明の趨向はやがて変移し、すでに決定済みの変容を遂げることになっており、前途が不明でない点より考えて、目下の文明の状況の如何にかかわらず、人間精神に何らかの指針を与え得る余地

が残されている。そしてこの史的循環は靈魂の再生という形で個人の孤立・消滅を許さず、個人の意志の少しも介入出来ない連続をくりかえすのである。従って彼の体系はあらゆる出来事、わけても最も恐ろしい事件をも体系の永遠の幻想に関連させることを可能にしている。

彼のあまりにも遠大な文明觀の真偽をたしかめる手段はないので、その捩り処と性格のみを推察することにする。一体イエイツの史的体系の根柢は如何なるもので、どのような発生の仕方をしたのであろうか。体系に向わんとする心情の萌芽は初期の詩に見られる通り、多年英国の圧制に苦悩しつづけて来たケルト国民特有の愛国的性質にあると考えられる。アイルランドの英国よりの独立精神は彼等の骨髓に徹しており、到底その奥底まで探りつくし得ない。イエイツは生々しい悲惨な現実から得た原動力の指向するままに、占星学の如き秘教に解決を求め、次第に体系化を余儀なくされたのであろう。

本来、史的体系は直感や洞察で解決出来兼ねる分野に属し、最も確実な資料にもとづいてなされても、危険極まりない独断的推論に終る場合が多い。もしかかる試みを敢えて行なうとすれば、人間精神の様々な潮流から憶測し、あいまいのまま留めておかねばならない。それどころか体系に具体性を賦与することなど、全くの不可能であろう。しかしイエイツは以下の引用に見られる通り、体系に具体性をもたせているのである。

After an age of necessity, truth, goodness, mechanism, science, democracy, abstraction, peace, comes an age of freedom, fiction, evil, kindred, art, aristocracy, particularity, war. (A Vision, p. 52)

次に、これを詩の中に辿って、体系の創造に与える機能を探索しよう。

イエイツの多くの詩の中で特に有名な詩とされているビザンチンの二つの詩は永遠の象徴を求めて作詩されている。初めの詩「ビザンチンへの船出」(Sailing to Byzantium)は暗黒の月に近づきつつある現今の文明と満月の相にあたるビザンチン文明との対照を根底としている。「幻想録」の中でイエイツは次の様にビザンチをあこがれている。

I think if I could be given a month of Antiquity and leave to spend it where I chose, I would spend it in Byzantium a little before Justinian opened St. Sophia and closed the Academy of Plato. I think I could find in some little wine-shop some philosophical worker in mosaic who could answer all my questions, the supernatural descending nearer to him than

to Plotinus even, for the pride of his delicate skill would make what was an instrument of power to princes and clerics, a murderous madness in the mob, show as a lovely flexible presence like that of a perfect human body. (AVision, p. 279)

またビザンチウム文明に関しては

I think that in early Byzantium, maybe never before or since in recorded history, religious, aesthetic, and practical like were one, that architect and arificers —though not, it may be, poets, for language had been the instrument of controversy and must have grown abstract—spoke to the multitude and the few alike. The painter, the mosaic worker, the worker in gold and silver, the illuminator of sacred books, were almost impersonal, almost perhaps without the consiousness of individual design, absorbed in their subject-matter and that the vision of a whole people. (A Vision, p. 280) と語り、想像力の天国であるビザチン文明の知的な美しさに独特の意義をもたせている。

「ビザチンへの船出」の第一連は若者の国即ち東の間の生の謳歌を讃美する世界を描いている。斯様なところは解体・困惑・物理的力や官能のうづまくイエイツの周囲にある現世である。

第二連では聖なる都ビザンチンにやって来た理由を次の様に述べている。

.....
Nor is there singing school but studying
Monuments of its own magnificence;
And therefore I have sailed the seas and come
To the holy city of Byzantium. (Collected Poems of W. B. Yeats,
p. 217)

「魂自身の立派さの記念碑を学ぶ以外に歌の学校はない」と第一連の最後の二行即ち

Caught in that sensual music all neglect
Monuments of unageing intellect. (ibid.)

は対応しており、上に引用した二行「すべてはあの官能の音楽に捉われて、老いることなき英知の記念碑を軽視している」の軽視せざるところは「歌の学校」の存在する「ビザンチンという神聖な都」であって、だから旅出つのだという。

第三連はすでに引用済みの、「幻想録」のビザンチン文明についての解説で明瞭である。第二連の「歌の学校」が第三連で具象されており、現代詩人の一人イエイツがビザンチンのモザイクにあらわされた聖人達の形をとった永遠の霊に対し、靈感を与えてくれる様呼びかけている。特に後半の部分は文明の暗黒の相の下にあるイエイツの希求をあらわしており、出色の感を抱かざるを得ない。

O sages standing in God's holy fire
As in the gold mosaic of a wall,
Come from the holy fire, perne in a gyre,
And be the singing-masters of my soul.
Consume my heart away; sick with desire
And fastened to a dying animal
It knows not what it is; and gather me
Into the artifice of eternity. (ibid., p. p. 217 and 218)

第四連はこの詩の最後を飾る部分であるが、第一連の暗黒相とビザンチン文明の満月相と照応し、芸術の形式に於て永遠を把握することが可能であるとのべている。すでに引用した「幻想録」散文の中で、金銀の細工師、モザイクの職人、建築師などの仕事には、精神と実践との一致が存在し、言葉をあやつる詩人等は抽象的になって一致を見ないとイエイツは語っており、詩の主旨と符合している。

上詩より四年後の1930年に作られたもう一つの詩「ビザンチン」(Byzantium)は複雑でかなり難解であるが、それだけに多様な彼の考えを集約していると見做される。

ビザンチンはイエイツの理想の都であり、その「ビザンチンへの船出」を思い立たしめた動機は前述の詩によって明らかである。このすばらしい都会では芸術の想像は如何に行なわれたであろうかとイエイツは思いを馳せる。この詩は芸術創造についてのイエイツの見解を描写したものと考えられている。

第一連では、この都会の昼のイメージ (image) が先づ導入され、後半より夜のイメージが勝ってくる。

.....
A starlit or a moonlit dome disdains
All that man is,
All mere complexities,
The fury and the mire of human veins. (ibid., p. 280)

夜の創造の世界は昼のありふれた経験の世界を嘲っている。

第二連に至ると、超人間的な一つのイメージが浮動する。「ミイラの布」は死体を包む布であり、人生経験の最終段階に於て着けるものという意味から人の世の経験を象徴している。「冥土の糸巻」は人間の靈魂をあらわし永遠の世界に属している。この靈魂が人生に再生するには、靈魂の自由を束縛する現世の系の桎梏をこうむり、糸巻の如くなるのである。現世に出現した靈魂は「ミイラの布で包まれた冥土の糸巻」の姿をして、この世と永世との通路即ち「曲折した道」を通ってくる。人生の経験は靈魂の束縛であり即ち死であり、その自由は生となる。そしてこの「糸巻」の口に呼びかけることは、現在にあって、それから開放される瞬間である。従って逆説的意味を有して来て「生中の死・死中の生」となるのである。これは、芸術創造の極致を示しているものと考えられる。

Before me floats an image, man or shade,
Shade more than man, more image than a shade;
For Hades' bobbin in found in mummy-cloth
May unwind the winding path;
A mouth that has no moisture and no breath
Breathless mouths may summon;
I hail the superhuman;
I call it death-in-life and life-in-death. (ibid.)

第三連では、ビザンチンの細工師の手になる黄金の鳥が永遠の世界に通ずる存在であって、第一連の「星明りに、また月にてらされた円屋根」と同様にこの世すべてをののしる。

猶、エルマン (Richard Ellmann) は

Yeats had learned from Eugénie Strong's *Apotheosis and After Life* that the cock, as herald of the sun, became 'by an easy transition the herald of rebirth' on Roman tombstones. (The Identity of Yeats, p. 220)

と述べており、より一層雄鶏の普遍的性格を例証している。

Miracle, bird or golden handiwork,
More miracle than bird or handiwork,
Planted on the star-lit golden bough,
Can like the cocks of Hades crow,
Or, by the moon embittered, scorn aloud
In glory of changeless metal

Common bird or petal

And all complexities of mire or blood. (Collected Poems of W. B. Yeats, p. p. 280 and 281)

第四連は、芸術創造のひらめきを炎であらわし、この炎が実在認識に至る手段となる。

最後の部分は、性を象徴する「海豚」によごれ、人生の「紛糾の苦々しい激情」に駆られたイメージが、次から次へと飛来して来る。皇帝の金工がそれ等を一つ一つ破壊する。しかしこの闘争は限りなく続いてゆき、これこそ実人生であって、しかも決して離脱することの出来ぬ詩人の創造の場であろう。そしてまた、それからの飛躍も、後退もかなわない死守すべき唯一の居処なのである。

Astraddle on the dolphin's mire and blood,
Spirit after spirit ! The smithies break the flood,
The golden smithies of the Emperor !
Marbles of the dancing floor
Break bitter furies of complexity,
Those images that yet
Fresh images beget,
The dolphin-torn, that gong-tormented sea. (ibid. p. 281)

美の完全なイメージは、体系の心理的・歴史的循環を超えて、不浄から解放される時に見出される。純化は悪無くしては存在しない。悪を承認することはイエイツの晩年の多くの詩にあらわれている主題であり、人間が歴史の如何なる時代に生をうけても、実在を認識し得る道を発見している。ある一時代が何等かの別の時代より優れているとか劣っているとかは、イエイツには考慮の対称となっていないのである。すでに触れた如く、我等人間の闘争は主観と客観のそれであって、「大車輪」上の諸相に宿命的に位置づけられ、ただ最善をつくすだけでその努力の質を云々する必要はないからだ。

勿論イエイツは背後に彼の体系があってはじめて、詩の広さを斯様な表現の劇的多様性にまで拡張する事が出来たのである。だから詩人の体系が詩の中でなり立ち、偉大な力を発揮するまでに至ったのであろう。その論理上の不完全さだけを指摘することこそ、理に溺れて全体を直視出来ぬ偏頗な見方と言うべきである。

IV

上記の二章は、イエイツの多くのすぐれた詩から極めて少数のものを抜き出し、第

一章の主旨に沿って考察したに過ぎない。ただエリオットの冒頭の言にある如く、より広い視野から眺望するの必要を感じ、その方向に幾分なりとも歩を進めたつもりである。

今日の様な世の中では、結局詩は詩的世界にとどまるとはいえ、これを公正に解説しようとする場合に要求されるものは、全体的視野である。そしてすぐれた作品に対する誠実な批評が、その誠実さの故に全く相反した結論に達することがある。これは、広い立場から、最も寛大な態度で本質を凝視するという一点をなおざりにしたことから起る。例えば、リチャーズ(I.A. Richards)の「詩と科学」(Science and Poetry)の中のイエイツに対する評言の数々は、これに類するといつてよいであろう。というのは、イエイツの詩が彼の体系を土台にして、理想的価値と事実や物質との間の闘争を解明し、その結果すべての現象を霊の表明と一致せしめたのは、現実や正義を把握するのが目的であつて、彼の体系はその補助的手段にすぎないからである。第二章で言及した彼の書簡が何よりの例証であり、従つて主客転倒による軽率な批評は、当然後退しなければならない。

かくして、現実の二元的対立を詩の思想性に一元化し、詩の中ではこの思想性が主題となつて、詩を成功に導いている。つまり、補助的手段としての要素が詩の美と低触することなしに、主導的立場になり得たのである。この理由は理論的に説明不可能であり、包括的な、また絶対的な思想により、世界がその中に包含され、世界即思想の一元性を確立したのであろう。そしてこの一元性は詩の思想を確信することによつて、一点の疑念も介入せしめることなく充足される。そこで、詩的真実となり、詩人はそれが所謂事実であることとは別の問題になるのである。

イエイツの詩は、彼の体系を述べた「幻想録」を忠実に詩に再生してはいない。「幻想録」は詩の思想の外郭をなすものであり、彼の思想は詩の中で初めて、その内実をさらけ出し完璧な想像状態となる。従つて詩は觀念や体系の写実にならないのである。しかし詩が思想の外郭を暗示し得ず、外郭との相関関係を絶つ場合には、理解不可能な得体の知れぬものとなる。また外郭を詩から分析抽出するだけにとどまるならば、詩の思想性をはなはだ、誤解することになってしまう。

そして、あらためて、イエイツをはじめとして第一級の精神の持主である詩人達が、たゆまず真摯に、現代という時代の中で、独創的思想に向かい如何に奮闘しているかを十分に再認識すべきであらう。それには、我々自身、虚飾を棄て眩惑を払いのけて、これ等の詩人に近づこうとする努力を惜んではならない。

現今の様に機械化された人生に於て、人間精神が受動的になることは最大の危険を

まねくことであり、詩が果そうとしている精神創造の機能を正当に評価し、我々に課せられた足跡を全うする一つの手立てと、それをなすべきであろう。

主要参考資料

(1) 詩 論 関 係

- J. Isaacs : The Background of Modern poetry
Cleanth Brooks : Modern Poetry and Tradition
C. M. Bowra : The Heritage of Symbolism
Raymond Tschumi : Thought in Twentieth Century English Poetry
I. A. Richards : Science and Poetry
佐山栄太郎著 形而上詩の伝統

(2) イエイツ関係

- W. B. Yeats : A Vision
W. B. Yeats : Autobiographies
W. B. Yeats : Essays and Introductions
W. B. Yeats : Mythologies
Collected Poems of W. B. Yeats
The Letters of W. B. Yeats, edited by Allan Wade
W. B. Yeats and T. Sturge Moore : Their Correspondence, 1901-1937, edited by Ursula Bridge
Hall & Steinmann : The Permanence of Yeats
T. R. Henn : The Lonely Tower
Rihard Ellmann : The Identity of Yeats
Rihard Ellmann : Yeats, The Man and The Masks
G. S. Fraser : W. B. Yeats
Joseph Hone : W. B. Yeats, 1865-1939
尾島庄太郎著 現代アイルランド文学研究
" " イエイツ, 人と作品
" 訳 イエイツ詩集
大浦幸男著 孤塔の詩人イエイツ

(3) そ の 他

- Marjorie Hope Nicolson : The Breaking of The Circle, Studies in The Effect of The "New Science" on Seventeenth-Century Poetry
The Poems of John Donne, edited by Herbert J. C. Grierson
Metaphysical Lyrics and Poems of the Seventeenth Century, selected and edited by H. J. C. Grierson
Bradley : Appearance and Reality
渡辺正雄編 科学と英文学

(本 学 講 師)